



つくばね vol.29 no.1

目次

- 1 日本語の書記法について
- 4 開学30周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」
記者の取材奮闘記 ～「筑波大学新聞」編集室の舞台裏～
- 5 とびっくす
- 6 平成14年度附属図書館統計
- 7 本学教官寄贈著書紹介
- 8 私の一冊
- 9 Ask Us としょかんミニガイド
- 11 掲示板



日本語の書記法について

林 史典

分野による差はあるが、学術情報は概して急激に増加している。そして、その情報は大部分が文字情報である。高度情報化社会と言っても、それは記録や通信の技術革命によるものであって、情報そのものは大半が言語、それも学術情報については、ほとんどが文字言語によって記録・伝達される。蓋し、文字の発明は文明の進化にとってたいへん大きな意味を持っている。文字なくして大量の情報を効率的に記録・蓄蔵できず、記録・蓄蔵された情報を利用することなくしては科学技術の進歩もまたあり得ない。こじつけになるが、そういう見方から文字と書記法について少し書いてみたい。ただし、もとよりあまり複雑な議論には立ち入らない。

20年ほど前の統計を見ると、例えば、Chemical Abstracts(CAS)が対象としている論文の言語は、英語が1位で全体の56.9%、それにロシア語・ドイツ語が続き、日本語はフランス語(4.2%)に次いで5番目(4.1%)である。日本科学技術情

報センター(JICST)の論文抄録では、日本語(8.6%)とフランス語(4.4%)の順が逆になっているが、上位3言語の順位に異同はない。医学文献でも、ほぼ同様の分布を示すらしい。勿論、現在は英語の比率がもっとずっと大きくなっているにしても、日本語が先端的な学術情報を記録する数少ない言語の一つであることに変わりはない。ところが、その文字と書記法は他の主要な言語に比して全く異質である。

日本語の書記法は、ラテン文字を用いる英語・ドイツ語・フランス語、キリル文字を用いるロシア語などと異なり、表意文字と表音文字を組み合わせた一種の混合システム(mixed writing system)である。混合書記システムとは、異なる文字法や異なる文字体系を組み合わせることで、古代に例はあるが、近代的な書記法としてはきわめて珍しい。

混合書記システムと言っても、古代の表語文字が案出した方法と異なって、日本語では、中国語

から借用した漢字が表意機能を、その漢字を元にして作った仮名が表音機能を果たす。なぜ、こんな書記法が生まれたのか、その理由を3点に要約してみよう。

これまでに知られている言語の数はおよそ3000、それに対して文字の種類は、既に失われたものを含めても約400に過ぎないという。多くの言語は、借用によって文字を獲得したわけである。そこでまず第一に挙げるべきは、日本語の借用した文字が漢字という表語文字であったことであろう。文字は、総じて、漢字のような表語文字（単語文字）、仮名のような音節文字、ラテン文字のような音素文字（単音文字）に分けられるが、表語文字はそれを生んだ言語の語彙体系に密着している上に表音性に劣るから、それを借用した言語にとってはたいへん使いにくい。そういうところに、表語文字が表音文字に変化する理由の一つがある。エジプトのヒエログリフにしてもシュメルの楔形文字にしても、文字の起原は漢字と同じ表語文字であるが、借用は、表語文字が表音文字に変化したり、表音文字として進化する大きな契機になる。

借用した表語文字を用いて自らの言語を自由に書記し、書記されたものから意図された語形を確実に読み取ることができるシステムを作り上げるためには、どうしても表音的手段が必要である。そこで、日本語も漢字を表音文字化し、表音文字化した漢字を略体化して平仮名・片仮名という音節文字を完成させた。付言すれば、仮名のように純粋な音節文字は他に例が少ない。音素文字ではなくて、音節文字になったのには、日本語音の構造的・体系的特徴 日本語が一定した構造の限られた音節で成り立っていること が関係している。

日本語に音節文字が完成した時期を示すのは、次のような事実である。すなわち、音素文字や音節文字は一定の配列法を生み出す。ラテン文字の配列順（ABC順。言うまでもないが、「アルファベット」という名称はギリシャ文字の最初の2字の読み方に由来する）は、その原型が早くも紀

元前14世紀のウガリト文字表に見出せる。ラテン文字に次いで使用面積が広いアラビア文字は、配列法をウガリト文字と同じセム系のアラム文字から受け継いだ。8世紀に字形による整序を加え、現在はこれが使われている。日本にも伝わった悉曇文字の配列法には、古代インドの音韻学が反映されている。同様に、仮名も10世紀には独自の配列法を生んだ。「あめつち」で始まる48字の配列が最初で、その後「たみに」「いろは」が現れる。970年撰の源為憲『口遊（くちずさみ）』（本図書館の和装本書庫にも、古典保存会の複製がある）は、

大為尔伊天奈徒武和礼遠曾支美女須士安佐利
（於）比由久也末之呂乃字

知恵倍留古良毛波保世与衣不祢加計奴
（田居に出で 菜摘む我をぞ 君召すと 求食り
〔追〕ひ行く 山城の うち

酔へる子ら 藻葉干せよ え舟繫けぬ）

という配列（「アルファベット」と同じように、冒頭部を採って「たみに」と言う）を掲げた後、

今案世俗誦曰阿女都千保之曾里女之訛説也
此誦為勝

と述べているから、この頃はまだ「あめつち」が用いられ、「いろは」は出現していなかったらしい。「いろは」の初出は、承暦三年（1079）の『金光明最勝王経音義』（これも、同書庫に複製がある）である。

音節文字の生成とともに重視すべきは、漢文訓読法の発明であろう。訓読法とは、日本人なら誰もが習った漢文の読み下し方のことで、漢語に固有の日本語（和語）を当てはめ、あるいはそのまま字音で読んで助詞や助動詞を補い、日本語の語序に読み下す方法である。訓読は、日本語が漢文に接した極初期から行われていると推定されるが、その習慣が漢字に和語を結び付け その結果として「訓読み」を作り、訓読体という独特の文体を発生させた。日本語と同様、漢字を借用した朝鮮語やヴェトナム語に「訓読み」ができなかったのは、おそらく訓読が発達しなかったからである。日本人は、中国語を外国語としてではな

く、自国語として読んでしまうというこの奇抜なやり方で、中国文化を摂取した。

かくして、訓や仮名で固有の日本語を書き表し、それに漢語を交えた文を綴る方法、そして、あらゆるタイプの文字 表語文字（漢字）と音節文字（仮名）、時には音素文字（ラテン文字）までもを混用するはなはだ珍しい書記法が成立した。日本語の書記法が現在のシステムに至る歴史的過程については省かざるを得ないが、ただ、現在のような書記法が確立した時期が意外にも漸く前世紀の半ばである点については、簡単に触れておかなければならない。日本語の書記法に関して、最も発達が遅れたのは句読法（punctuation）である。読点（、）を付すことが一般化するのには明治時代の中頃、文末に句点（。）を付ける習慣が定着するのは昭和20年代からである。句点の浸透を遅らせたのは、統語上、述語が文末に位置する

ので、そこに現れる特定の形式 文法的形態やそれを表す文字 が自ずとその標識になったからである。清・濁も、近代に至るまで厳格に書き分けられていない。内容にわたる是非はともかく、漢字の使い方や仮名遣い、送り仮名などに一定の基準が設けられるのも、昭和20年を待たなければならなかった。

どんな書記法にもそれぞれの特徴があると考えべきであって、日本語の書記法に関して、軽々にその功罪・得失を断じるのは適切でない。しかし、その書記法が持つ優れた表語性と引き替えに、漢字という大きな文字体系と煩雑な規則・習慣を必要としながら、なおかつ正書法（orthography）が定まりきらないという代償を払い続けなければならないのは事実である。

（はやし・ちかふみ 文芸・言語学系教授 / 附属図書館長）

* 「口遊」〔1300・43, 1300・240, 1300・284, 1300・305,〕

** 「金光明最勝王経音義」〔1320・150〕





開学30周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」 記者の取材奮闘記 ～「筑波大学新聞」編集室の舞台裏～ 蒔田 備憲

私が初めて大学新聞を読んだのは、入学式の時だった。自分の名前が大学新聞に載っているのを見て喜び、筑波大学に入学したことを実感した。式と同日に発行する4月号には、例年新入生全員の名前・出身高校を掲載している。きっと毎年、新入生は私と同じ思いを抱いているだろう。その「舞台裏」、編集部は、2000人以上の名前を、3?4度、1人1人確認し、誤植を防いでいる。

筑波大学新聞は1974年、開学1年目の10月26日に創刊した。過激派学生のプロバガンダでも、大学当局の作る味気ない広報紙でもない、学生・教員・事務官の3者が協力する体制の新しい新聞を製作した。

しかし創刊直後から、新聞製作をめくり模索が続いた。76年、新聞の独立をめぐって3カ月発行停止になった。82年には、大学と学生記者が企画をめぐって対立し、大学側に反発した学生が編集部を集団脱退。彼らは「筑波学生新聞」を創刊した。（「筑波大学新聞200号」200号記念特集）

このように、その活動は平坦ではなかったが、大学新聞は一学生の活動から、構内で起こった殺人事件まで、本学に関係するニュースを幅広く伝えてきた。2003年5月12日発行の新聞で、その歴史は229号に上る。

入学直後、同じ学類の先輩に誘われ、私は大学新聞編集部に入部した。大学新聞の仕事は、その性格上、掲載記事に対する責任が重い。また、忙しい時期には、生活時間が昼夜正反対になり、授業をたびたび寝過ごしてしまうなど、苦勞も多い。だが、この仕事に携わっていたおかげで、個性豊かな部員との出会い、異なる文化を持つ留学生との対話、世界的なスポーツ選手への取材など、普通の大学生活では味わえないような体験を数多く得た。

2年間を振り返り、2つの取材が強く思い出に残っている。初めて取材した時のこと、昨年12月、

バレーボール部の全日本インカレを取材した時のことである。

初めて取材をしたのは、6月の宿舍(やどかり)祭だった。来客者から一言コメントを取るのにも、オドオドしていた。カメラを持っていても、何をどのタイミングを取ればいいのか分からず突っ立ち、まともな写真を撮ることができなかった。

そんな私を尻目に、付き添いの先輩は、ためらいなく声を掛けていた。シャッターチャンスがあれば、他人をかき分けて、被写体に食い入るように撮った。

祭開催中、ちょうど6月号の編集作業が大詰めの日だった。先輩たちは1日中編集室で仕事に明け暮れていた。この時期、作業は毎日夜が明けるまで続く。中には、編集室で眠り込んでしまう人もいた。新聞発行の舞台裏を覗き、「やり手」の先輩達の姿に憧れ、この仕事に強いやりがいを感じた。

先輩たちに一から百まで助けてもらった記事ではあったが、取材して書いた記事と名前が、新聞に掲載されたのは心に残った。未体験づくしで刺激に満ちていた人生初の取材を通し、私は大学新聞の仕事にどっぷりはまっていた。

全日本インカレの取材は、大学生活の中で一番感動した出来事になった。

この大会で、男子は史上初の六連覇を達成した。女子も15年ぶりに優勝し、史上3校目のアベック優勝を果たした。バレー部担当だった私は、運良く快挙達成の場に居合わせることができた。

取材当日は朝5時に起き、重い3脚と500ミリの長い望遠レンズを付けた1眼レフを持ち、東京の東京体育館へ向かった。コートから10メートルも離れていない席に座り、カメラを構えていた。

バレーの試合を生で観戦するのは初めてだった。選手のジャンプ力、スパイクのスピード、コートにたたきつけられるボールの音…。コートを

包む熱気に体が震えた。

現地取材ならではのアクシデントにも出会った。男子の試合途中、コート外に飛び出したボー



「筑波大学新聞」編集：筑波大学新聞編集委員会
発行：筑波大学 1974年創刊
中央図書館本学関係資料室に所蔵

ルが望遠レンズを直撃。カメラとの接触部分が壊れ、私の右目の周辺が赤くなり、少し擦りむけた。急いで近くのコンビニに走り、接着剤を買った。

男子が優勝を決めた瞬間、会場は選手の叫び声と観客の歓声であふれかえった。私は監督のもとへ走り、握手を交わした。そのあと、選手達の歓喜の輪にまざって、喜びを分かち合い、生の声を聞くことができた。取材に行った甲斐あって、迫力あるアタックの写真を掲載する事ができた。2年間で、最も充実した取材だった。

私たち現3年生は、12月に発行する234号をもって、編集部を引退する。残り僅かな時間だが、2年間で得た以上に充実した取材をし、読者に正しい情報と大学の姿、驚きと感動を伝えるように仕事に取り組みたい。

(まきた・まさのり 社会学類 3年 / 「筑波大学新聞」編集長)



とひらくす

【見学者】

韓国亜州大学校訪日団 5月29日(木)
JAICAマレーシア東方政策産業技術研修生一行
5月30日(金)

【学外会議】

第59回関東地区国立大学図書館協議会総会
4月24日(木)山梨大学で開催された。
電子ジャーナル・タスクフォースについて等の報告や、国立大学法人化に向けた各大学附属図書館の最新の取り組み状況について等の協議が行われた。

【学内会議】

第256回附属図書館運営委員会(4月)
大塚地区に「体育研究科スポーツ健康システム・マネジメント専攻」が新設されたことに伴う各種委員会委員の追加、各専門委員会委員の選出及び

委員長の名指が行われた。

自動貸出・返却装置の導入について、開学30周年記念附属図書館特別展について等が報告された。

第257回附属図書館運営委員会(5月)

貴重図書及び準貴重図書の指定について、開学30周年記念附属図書館特別展について、図書館資料整備に係る検討委員会の設置について等の審議が行われた。

各種委員会報告、平成14年度附属図書館資料購入計画決算報告、平成14年度附属図書館業務統計について等が報告された。



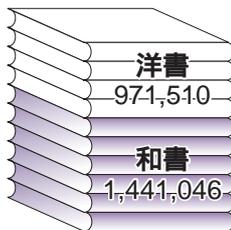


平成14年度附属図書館統計

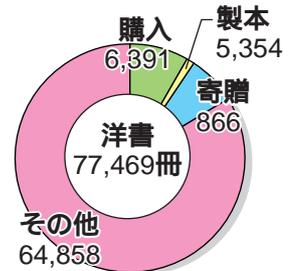
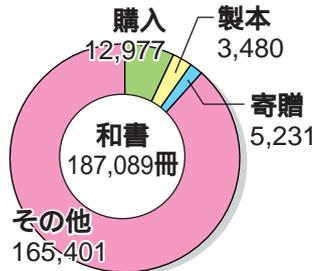
詳細な統計は，WWWページでも提供しておりますのでご覧ください。

URL <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/outline/statistics-2002.pdf>

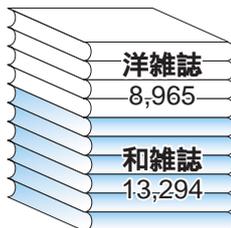
蔵書数 2,412,556冊



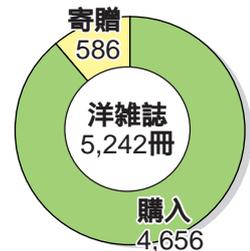
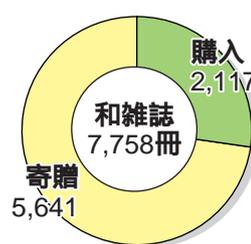
年間受入冊数 264,558冊



所蔵雑誌タイトル数 22,259種



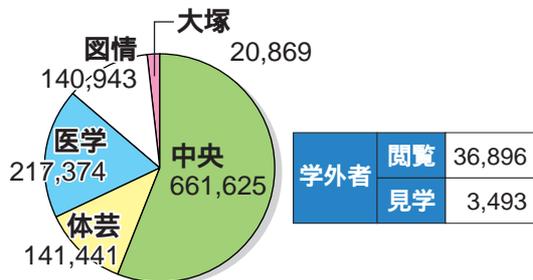
継続雑誌タイトル数 13,000種



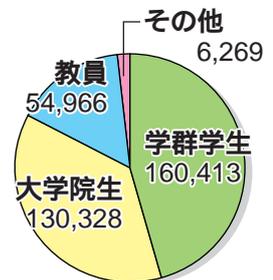
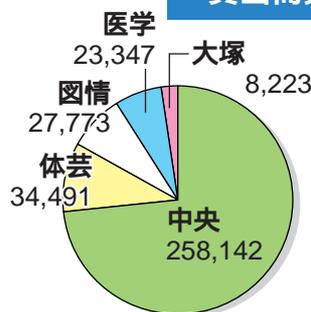
オンラインジャーナルタイトル数 3,179種

電子図書館 学内生産資料 登録数(件)	研究紀要	学位論文	研究成果報告書	学事報告等
	52	1,074	331	175

入館者総数 1,182,252人



貸出冊数 351,976冊



学内サービス対象者数 21,814人

利用者タイプ	教員	職員	学群学生	大学院生
人数	3,015	1,874	10,164	6,761



本学教官寄贈著書紹介

平成15年1月～3月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介いたします。

(敬称略, 寄贈者五十音順, 所属は平成15年度のものです。〔 〕内は配架場所と配架番号です。)

赤阪 健 (化学系)

- ・ Endofullerenes : A new family of carbon clusters, Kluwer Academic, 2002
〔中央 435.6-A32〕

足立泰久 (農林工学系)

- ・ 土のコロイド現象 : 土・水環境の物理化学と工学的基礎 / 岩田進午共編著 . 学会出版センター, 2003〔中央 613.53-A16〕

有光敏彦 (物理学系)

- ・ Non-commutativity, infinite-dimensionality and probability at the crossroads / edited Nobuyuki Obata, World Scientific, 2002 (Quantum probability and white noise analysis:16)〔中央 417-O12〕

五十殿利治 (芸術学系)

- ・ モダニズム / ナショナリズム : 一九三〇年代の日本の芸術 / 水沢勉共編 . せりか書房, 2003〔体芸 702.16-O64〕

浦山 修 (臨床医学系)

- ・ 臨床化学検査学 . 医歯薬出版, 2003 (臨床検査学講座)〔医学 492.1-U84〕

門脇厚司 (教育学系)

- ・ 学校の社会力 : チカラのある子どもの育て方 . 朝日新聞社, 2002 (朝日選書 : 707)
〔中央, 体芸 375-Ka14〕

桑原敏明 (名誉教授)

- ・ 教育改革への提言集 / 日本教育制度学会編 . 東信堂, 2002〔中央 373.1-N77〕

斎藤恒雄 (電子・情報工学系)

- ・ デジタル画像処理 / Kenneth R. Castlema 著 . 科学技術出版, 2002 (デジタル信号処

理 / 画像処理シリーズ)〔中央 007.1-C25〕
笹本 純 (芸術学系)

- ・ マン美研 : マンガの美 / 学的な次元への接近 / ジャクリーヌ・ベルント編 . 醍醐書房, 2002
〔体芸 726.1-B38〕

高橋伸夫・手塚 章・村山祐司 (地球科学系)

- ・ EU統合下におけるフランスの地方中心都市 : リヨン・リール・トゥールーズ . 古今書院, 2003
〔中央 293.5-Ta33〕

芳賀脩光 (体育科学系)

- ・ トレーニング生理学 / 大野秀樹共編 . 杏林書院, 2003〔体芸 780.193-H12〕

福田 弘 (教育学系)

- ・ 人間性尊重教育の思想と実践 : ベスタロッチ研究序説 . 明石書店, 2002
〔中央 371.234-F74〕

星野 豊 (社会科学系)

- ・ Securities and exchange law ; Cabinet order and selected ordinances ; Law on foreign securities firms. Capital Markets Research Institute, 2002〔中央, 大塚 325.9-Se13〕

松井 陽 (臨床医学系)

- ・ こどもの病気の地図帳 / 鴨下重彦, 柳澤正義 監修 . 講談社, 2002〔医学 483.9-Ko21〕

松本 宏 (応用生物化学系)

- ・ 次世代の農薬開発 : ニューナノテクノロジーによる探索と創製 / 日本農薬学会編 . ソフトサイエンス社, 2003〔中央 615.87-N77〕

門田安弘 (社会工学系)

- ・ 組織構造と管理会計 . 税務経理協会, 2003
〔中央 336-Mo32〕

綿抜豊昭 (図書館情報学系)

- ・ 近代礼法書目録稿 / 豊谷美保, 陶智子共編 . 故実礼法学会, 2003〔図情 385.4-To93〕



私の一冊

足立 泰久

『土のコロイド現象
- 土・水環境の物理化学と工学的基礎 - 』
(学会出版センター)
〔中央 613.53-A16〕



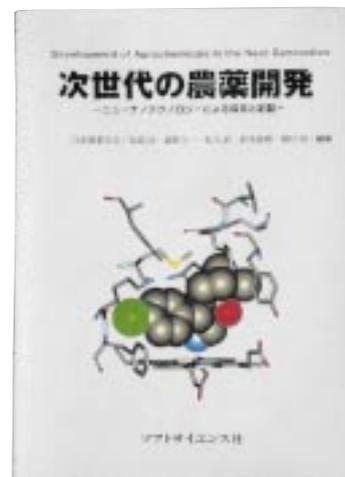
コロイド現象が科学の対象として認識されたのは非常に古い。既に、レオナルド・ダ・ヴィンチは15世紀末に毛管現象に関する記述を残している。毛管現象は、ラプラスやヤングらによって解析され、18世紀には表面張力や接触角などの重要な概念が明らかにされている。これは主に物理学の成果である。コロイドの表面は必ずといってよいほど電気を帯びているが、このことは帝政ロシアのラウスによって1805年に解明されている。錬金術を試みていく中での発見であるので、これは現在でいえば化学の成果と言うことになる。一方、農業にとって不可欠な土の研究の歴史も非常に古い。無機栄養説を唱えた農芸化学の父と呼ばれるリービヒは今年で生誕200年を迎える。1856年にパリの水道技術者ダルシーによって導かれた地下水移動の基本法則は、水理学（土木分野における流体力学）の成果として位置づけられる。本書「土のコロイド現象」ではこうした様々なルーツを持つ諸科学を融合し体系化することを試みてい

る。このような横断的体系化は水圏、土壌圏を巡る環境問題に対処するために大きく抜け落ちていた側面ではないかと考えた。構成は、まず、土のコロイド現象を土壌学の歴史の中でレビューし、次に土のコロイドの構成単位となる粘土、腐植、酸化物を記述した。しかし、単位を明らかにしてもその環境学的意味は不十分である。この点を農学的な土壌区分より論じた。翻って、ブラウン運動、光散乱、界面電気、などの物理現象を論じ、さらに環境汚染物質の移動など、マクロなスケールの諸問題に関連付けた。特に、理論的な出発点をアインシュタインのブラウン運動の理論に求めたことは、コロイドのダイナミクスを扱うテキストとして本書の特徴である。荒削りであることは否めないが、こうした体系化において自分の知る限り類書はない。

(あだち・やすひさ 農林工学系助教授)

松本 宏

『次世代の農薬開発
- ニューナノテクノロジーによる探索と創製 - 』
(ソフトサイエンス社)
〔中央 615.87-N77〕



我が国における本格的な農薬利用の歴史は、第



二次世界大戦後に海外から導入した合成化学物質や天然物を作物生産に使用したことに始まる。戦後の工業化に伴う農業従事人口の急速な減少の中、食糧の確保に農業の果たしてきた貢献ははかり知れない。しかし、一方で社会のニーズに圧され、毒性や環境安全性面での検討が不十分のまま広範囲に使用された結果、毒性や残留蓄積に起因する諸問題を起こしてきたことも事実である。これへの反省から1971年の農薬取締法の改正時から危険性の指摘された農薬の製造販売が禁止されると共に、さらに厳しい毒性試験が課せられるようになった。その後の環境影響へのさらなる関心の高まりや研究開発技術の発展と共に、農薬として用いられる化学物質は一層の低毒性化、低薬量化がはかられ、その他の性質についても飛躍的改良がもたらされている。この結果、近年開発された農薬については毒性や環境問題を起こしているものはないとされる。しかし、化合物の開発と性質のチェックはその時代における最高の科学水準で行われるべきであり、また、これからの21世紀社会では限りある地球環境を理解し、人間と自然のさらなる調和を志向した持続的発展が強く求められている。本書はこのような状況を踏まえ、今後

の農産物生産と環境保護を技術面から考究して行く上で、農薬開発の方途となる最先端のテーマを取り上げて詳細に解説したものである。企画は日本農薬学会が21世紀記念事業として行い、分子設計、新規ターゲットと新しいタイプの防除剤、植物機能改良剤の3編から構成される27課題について、学会から依頼を受けた研究者が分担執筆している。私も雑草防除剤の中のエネルギー代謝阻害剤の部分を担当し、作用機序にかかわる最近までの知見と今後の開発の方向性について論述した。農薬の作用性研究の進展と今後の開発の方向性について興味をもつ方々にご一読いただくことを切望している。

(まつもと・ひろし 応用生物化学系教授)



ASK US としょかんミニガイド

WWW版OPAC動画ナビゲーションについて

附属図書館では、今年2月からWWW版OPACで検索した中央図書館の資料の所在を動画にてご案内する「動画ナビゲーション」のサービスを提供しています。すでに多くの方にご利用いただいているかと思いますが、今回のAsk Usでは、このサービスについてご紹介します。

検索結果を得てから動画ナビゲーションにたどり着くまでの手順は次ページの図のようになります。

動画では、あたかも目的地まで実際に歩いているかのような映像が映し出されます。

この動画ナビゲーションを利用するためには、Windows版Internet Explorer 5.5以上(その他のブラウザでは正しく表示されないことがあります)をご使用いただくほか、Adobe Systems社のSVG ViewerとRealNetworks社のRealPlayerまたはRealOne Playerがインストールされている必要があります。詳しくは下記URLをご覧ください。
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/navi.html>
(システム管理係)

WWWのOPACで下のような検索結果の画面が出たら、



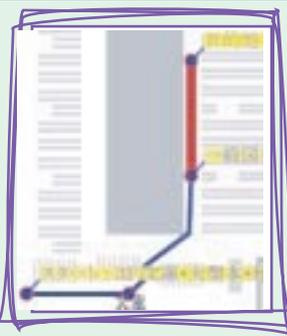
中央（所在）の部分をクリックすると下のような配架場所案内のウィンドウが開きます。



右上の画面で「動画によるナビゲーション」というボタンを押すと下のようなナビゲーション画面のウィンドウが開きます。

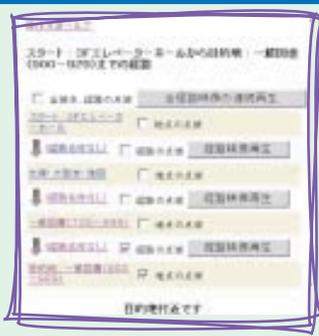


地図表示ウィンドウ



所在までの経路が図示されます。経路表示ウィンドウで選択した経路や場所が点滅します。

経路表示ウィンドウ



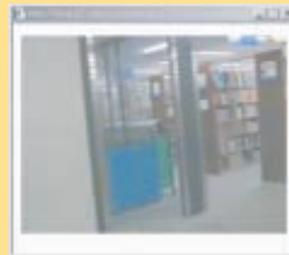
動画表示及び地図表示ウィンドウで点滅表示させたい経路や場所を選択できます。ヘルプ画面へのリンクもあります。

経路表示(詳細)ウィンドウ



経路表示ウィンドウを少し詳しくしたものです。

このような動画で経路をご案内します。





掲示板

夏季休業中の貸出について

夏季休業期間（7月2日～8月31日）の開館時間及び図書の貸出期間等は下記のとおりです。

開館時間及び貸出受付時間

	期 間	開館時間	貸出受付時間
中央図書館	7/2～8/31	9:00～17:00	9:00～16:30
体芸図書館			
医学図書館		9:00～20:00	9:00～19:30

* 土曜日・日曜日・祝日は閉館します。

	期 間	開館時間	貸出受付時間
図情図書館	7/2	9:00～17:00	9:00～16:30
	7/3～8/31 (月～金曜日)	9:00～20:00	9:00～19:30
	7/5, 12, 26, 8/16 (土曜日)	13:00～18:00	13:30～17:30

* 上記以外の土曜日と日曜日・祝日は閉館します。

貸出期間（全館共通）

6月24日(火)から8月22日(金)までの間に、一般貸出および更新を受けた図書の貸出期間は、通常の3週間より長くなります。

これらの図書の返却期限は、9月1日(月)から9月12日(金)の間のいずれかの日となります。返却期限を確認し延滞のないように注意してください。

詳しくは図書館ホームページ、または各図書館の掲示をご覧ください。また、不明な点は各館のメインカウンターまでお問い合わせください。

自動貸出装置が入りました

中央図書館2階掲示板近くと図書館情報学図書館カウンター横に自動貸出装置を設置しました。カウンターに利用証と図書を出さなくても、自分で貸出、更新ができますのでご利用ください。なお、表紙の外側にバーコードの貼ってある図書だけが対象となり、中央図書館では一部の図書に限られますのでご注意ください。

貴重品ロッカーが利用できます

中央図書館メインカウンター前に貴重品ロッカーを設置しました。貴重品を持って入館した場合は、暗証番号方式のこのロッカーにバッグ等を預けてください。館内での紛失・盗難等の事故を未然に防ぎ、安心して図書館をご利用いただけます。

無線LANシステムの運用開始について

中央図書館では平成15年5月1日より、無線LANシステムの運用を試行的に開始しました。アクセスポイントは他館でも順次増設予定です。

サービスを利用するには、IEEE 802.11bに準拠した無線LANカード及び、それを使用することの出来るパソコンが必要です。

図書館では機器の貸出は行っておりませんので各自ご用意下さい。サービスの詳細は下記URL（学内アクセス限定）をご覧ください。

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/tsukuba-only/wireless/>

図書館PRパンフレットについて

このたび附属図書館では、学習及び教育・研究活動支援と学術情報の収集・提供・発信の要である図書館の活動を十分に理解していただくため、PRパンフレット「新世代 ハイブリッド図書館 筑波大学附属図書館 - エクセレンスへの挑戦 -」を作成しました。開学以来30年、全国の大学図書館の中で先進的な取組を続けてきた本学附属図書館は、資料の集中管理と全面開架方式により館内利用の面で使いやすさを追求するとともに、電子ジャーナルや学術論文情報データベース等を提供する電子図書館サービスにも先導的に取り組んできました。このパンフレットは、その活動内容をデータも交えながら分かりやすく紹介しています。



編集室だより

今年10月に筑波大学は開学30周年（創基131年）を迎えます。これを機に館報「つくばね」でも、本学関係資料として図書館で永く収集保存している学内刊行物に目を向けてみました。関係者の皆さんには、発行に至る苦労話や舞台裏のエピソードなどを語っていただき、その資料に対する思い入れや、新たな時代への意気込みなどをお聞きできればと思います。今回は筑波大学の歴史を学生の目線で見続けてきた「大学新聞」を取り上げました。若い読者の方々にも身近に共感していただけたのではないのでしょうか。1年間4回シリーズで連載する予定ですのでご期待ください。

(H. H.)

本年度の館報『つくばね』編集委員は、次の9名です。

主査：情報管理課長 伊藤 則男

副主査：情報管理課企画渉外係長 安島 明美

情報管理課：渡邊 朋子

情報サービス課：原澤 仁美，板井 賢二，
福井 恵，飯田 貴子

情報システム課：本間静一郎，船山 桂子